

成果報告書

記入日 2023 年 9 月 21 日

フリガナ：(オオイシ トモコ) 氏 名： 大石 友子	渡航先国名 タイ	留学先の所属機関：チェンマイ大学 RCSD 帰国後の所属機関：広島大学大学院国際協力研究科
研究テーマ：現代タイにおけるクアイの人々とゾウが織りなす共同性に関する文化人類学的研究-相互作用としての観光開発事業に着目して-		
研究期間： 2021 年 5 月 ~ 2023 年 5 月 (2 年 0 ヶ月)		
研究成果 (概要) COVID-19 パンデミック下のタイにおける飼育ゾウを取り巻く多種のアクターのネットワークの変容に注目し、クアイのゾウ使いとゾウの相互交渉に関する行動調査や、観光開発事業での参与観察を行った。これを通じて、多様な種の共同体としてのゾウの村で生じるケアという共同性の諸相を明らかにした。		
研究成果 (詳細) 【研究の背景・目的】 タイ東北部スリン県及びブリラム県には、クアイの人々とアジアゾウが暮らす「ゾウの村」として知られる地域がある。ここでは、ゾウは各家庭の敷地内で飼育されており、ゾウが家族の一員として語られることが特徴だとされている。先行研究では、クアイの人々とゾウの関係は相互依存の関係にあることが指摘されてきた。しかし、調査方法としてクアイの人々の語りに重きが置かれてきたことから、クアイの人々がゾウを使役することで生計を立てる様子が描き出される一方、日常生活の中でクアイの人々とゾウがどのように関わり、そこで何が生じているのかは十分に記述されてこなかった。 一方、多様な種の絡まり合いに焦点を当てた研究では、人文学において従来は人間のみが構成員として論じられて来た共同体の概念を、動植物や人工物も含むものとして捉える見方が提示されている。そこで、本研究では、ゾウの村をクアイの人々やゾウを含む多種のアクターの交錯によって生起する共同体と捉え、ともに生きる場における実際の関わり合いを描き出すことを目指した。とりわけ、この地域に持ち込まれている観光開発事業に注目することで、齟齬が解消もしくは問題化する様子を記述し、多様なアクターが交錯する中で織りなされる共同性や相互作用を明らかにすることを目的とした。 【研究方法】 クアイの人々やゾウがともに暮らす場における交錯を描き出すために、三つの調査を実施した。 一つ目は、タイのゾウを取り巻くマクロな文脈についての調査である。近年、タイのゾウに関連する産業や政策は、飼育ゾウの頭数が多いタイ北部を中心として変遷している傾向がある。そこで、タイ北部に事務所を構えるゾウ関連機関や、エレファント・キャンプへの聞き取りを行った。調査期間中は COVID-19 の感染対策としてタイ政府による非常事態宣言が発出されており、ゾウを取り巻く環境が大きく変化していたため、パンデミック下の飼育ゾウが置かれた状況に関する情報収集も併せて行った。		

二つ目として、クアイの人々とゾウの実際の関わりを記述するために、動物行動学における行動調査の手法を取り入れ、日常生活における相互交渉についてのデータ収集を行った。これにより、人間の語りに偏重したデータ収集という先行研究の調査手法上の課題を乗り越えることを目指した。

三つ目は、多様な種の共同体としての「ゾウの村」と共同性や相互作用に焦点を当てた調査を行った。本研究の主たる調査地であるタイ東北部スリン県及びブリラム県のゾウの村では、タイ全国の観光施設へ出稼ぎに出ていたゾウとゾウ使いが COVID-19 のパンデミック下で失業し、この地域に戻ってくるという事態が生じていた。失業ゾウやゾウ使いを迎え入れながら、ゾウ、ゾウ使い、所有者、植物、人工物といったアクターたちの絡まり合いが変化する様相を捉えるために、ゾウのいる家庭での住み込みの参与観察、ゾウ使いへの聞き取り、失業ゾウに関するアンケートを実施した。また、調査地には、県自治体と動物園機構による二つの観光開発事業が持ち込まれている。これらの事業での参与観察と聞き取りを行い、普段は安定している多様なアクターの関係において齟齬が生じ、解消もしくは問題化する場面に注目をした。とりわけ、調査期間中は、COVID-19 による環境の変化の影響でゾウの体調不良が頻繁に発生していたことを受け、動物園機構の観光開発事業が運営するゾウを対象として医療サービスを提供する病院（エレファント・ホスピタル）での参与観察を本研究の主軸とし、研究を進めた。

【研究成果】

1. タイの飼育ゾウと COVID-19 による攪乱

タイのゾウは、IUCN により絶滅危惧種として指定されているアジアゾウに区分される。ゾウ関連機関への聞き取り調査によって、タイの野生ゾウは約 4,000 頭 [DNP, 2023]、飼育ゾウは約 3,800 頭 [Thai Elephant Alliance, 2022] がいるとされ、一時は野生・飼育ゾウともに個体数が減少したものの、現在は増加傾向にあると認識されていることが明らかとなった。飼育ゾウは、タイ南部で林業に従事するゾウを除けば、ほとんどが観光業に従事しているとみられている。飼育ゾウを「再野生化」するプロジェクトも実施されてきたが、森林面積の減少や莫大な費用といった問題が残されている。そのため、観光施設が居住地や食糧を提供することで、飼育ゾウの生活基盤が守られてきたと言える。

しかし、2020 年に生じた COVID-19 の世界的な大流行により飼育ゾウの置かれた環境が一変したことが、タイ北部のエレファント・キャンプへの聞き取りを通じてわかった。2020 年 3 月、タイ政府は非常事態宣言を発出し、国内外の移動の制限や、娯楽施設等の一時閉鎖を行った。これにより、飼育ゾウが従事してきた観光施設は観光客による収入を失うこととなり、ゾウ使いやゾウに対する給与の支払いのみならず居住地や食糧を提供することも難しい状況となった。主にタイ北部を中心に活動してきたゾウの支援団体は、寄付金を使った支援を展開した。だが、ゾウ使いとして働いていた従業員や個人所有のゾウたちが解雇され、施設を追われる事例がタイ全国で相次いだ。観光地の施設で働いていたクアイのゾウ使いとゾウも多くが失業し、何百キロも離れたゾウの村へと戻ることとなった。

このように、COVID-19 はタイの飼育ゾウとゾウ使いたちが拠り所としてきた観光施設におけるケアを攪乱し、人、ゾウ、食糧、環境などのネットワークの切断を引き起こしていることが明らかとなった。一方で、この切断は新たなネットワークとの接続を意味している可能性がある。そこで、失業したクアイのゾウ使いとゾウたちが目指す場となったスリン県及びブリラム県の状況を追った。

2. 多種の共同体としてのゾウの村

スリン県及びブリラム県では、ゾウはクアイの人々の家の敷地内で暮らしており、人間とゾウが生活

圏を共有していることが特徴と言うことが出来る。日常の場におけるゾウとゾウ使いの相互交渉に注目した行動調査からは、ゾウたちが、匂いや声から人間やゾウを個体認識し、相手に対して異なる態度を取る様子が観察された。多くのゾウはゾウ使いが使用するバイクや車のエンジン音も聞き分けており、ゾウたちがゾウのみならず人間や人工物とも関係を築いていることが示唆された。一方、ゾウ使いたちは、こうしたゾウの行動を日々観察し、言葉や道具、身体を用いてコミュニケーションを図っていた。また、ゾウと人間は同じくらいの寿命を持つため、所有者とゾウ使いが同一人物であるか家族内の人間であることの多いこの地域では、その関係は長期に渡ることが一般的である。これらのゾウとの場の共有、やりとりの積み重ねによる個別の関係、人間とゾウの時間性が、クアイのゾウ使いたちのゾウを「家族」の一員とする語りを生み出していると考えられる。

COVID-19 以前のゾウの村は、人、ゾウ、人工物などの関係が比較的安定し、観光開発事業を訪れる観光客を受け入れることでゾウやゾウ使いの生をつなぐ多種の共同体であったと捉えることが出来る。しかし、COVID-19 のパンデミックにより、失業ゾウとそのゾウ使いが参入するとともに、このバランスが崩れることとなった。その様子を観光開発事業の運営するエレファント・ホスピタルにて観察した。

3. 可視化されるアクターと共同性

パンデミック下のゾウの村では、儀礼や行事の中止が相次ぐとともに、二つの観光開発事業も施設の一時閉鎖を余儀なくされた。これにより、事業に参加している 280 頭のゾウたちが得ていた行事での謝礼やチップといった副収入がなくなった。この状況を打開するために、若いゾウ使いたちはソーシャルメディアを通じた動画・ライブ配信を行い、オンラインを通じて収入を得るようになった。この実践は他の世代のゾウ使いや、県外から戻って来た失業ゾウのゾウ使いにも波及し、ほとんどのゾウ使いが「YouTuber 化」した。しかし同時期に、ゾウたちに原因不明の深刻な腹痛や便秘が生じるようになった。

この異常事態に対応するために、観光開発事業の運営するエレファント・ホスピタルがゾウの食糧についての情報収集を行う一方、ゾウ使いたちもゾウの観察を重ねた。これらの取り組みにより、ゾウの体調不良の原因はライブ配信機能を使ったゾウへの餌やりである可能性が浮上した。そして、ゾウ使いやゾウを巻き込んだ実験が行われ、ゾウが副食である果物を大量に摂取することで腸内細菌のバランスが崩れ、特定の生理活性物質が生成されることにより腹痛や便秘が生じることが明らかとなった。ここでは、食糧となる植物や果物、腸内細菌、生理活性物質といったアクターが可視化された。

ホスピタルでの調査を通じて、多種の共同体としてのゾウの村を作り出す関係は常に変容しており、誰（何）がその構成員とされるのかもその都度変化する様子を観察することが出来た。そこでは、ゾウの生をめぐる、観察、実験、知識の生産が行われており、共同性としてケアが様々な様相で織りなされていることが明らかとなった。

【今後の課題】

パンデミックという特殊な状況下での調査となり、現在進行形で生じていたゾウを取り巻くネットワークの変容と実践に注目をして研究の遂行を図った。既存の研究では、飼育ゾウのケアは、再野生化か観光施設における労働を通じることでしか得ることが出来ないとする議論が一般的だった。それに対し、パンデミック下で収集したデータは、そのいずれでもない個別具体的な関係の中で生じるゾウのケアの可能性を示唆している。今後はゾウの保護という文脈にも本研究を位置づけて考察を行いたい。

留学中の生活・研究でのトピックス

この留学は、COVID-19 のパンデミック下で渡航を延期するということから始まった。2021 年 5 月にパンデミック以前よりも煩雑な手続きを経てタイに入国したものの、タイ政府の発出した非常事態宣言の影響で隔離、移動の制限、図書館の閉鎖など、当初の計画通りに研究を進めることが出来ない状況が続いた。その後、本来の調査地であるスリン県に入ることが出来てからも、感染対策の観点から調査方法や調査対象の変更を重ねることになった。しかし、その度に、松下幸之助国際スカラシップの OBOG の先生方、松下幸之助記念志財団の皆様、留学先であるチェンマイ大学 RCSD の院生や先生方、そしてクアイのゾウ使いや観光開発事業のスタッフの方々からアドバイスを頂き、パンデミック下であることを活かした調査を行うことが出来た。この場にて、心より感謝申し上げます。

主な調査先となった観光開発事業のエレファント・ホスピタルでは、参与観察を通じて、ゾウに関連する研究を行うタイ人研究者たちとのネットワークを築くことが出来た。ホスピタルの研究や、外部の研究者の研究にも携わらせて頂き、自分自身の研究分野に囚われずに様々な経験や知識を得ることが出来たことで、当初の計画にはなかった形で研究の視角を広げることにつながった。COVID-19 による「攪乱」がゾウやクアイの人々を取り巻くネットワークの切断と接続をもたらしたように、私の研究も多種のアクターたちの絡まり合いの変容に応じて変化することとなった。

長期のフィールド調査において強く印象に残っているのは、ゾウに関わる人々が口にしていた「ゾウのことはわからない」という言葉である。ゾウの扱いに長けていると言われるゾウ使いも、ゾウの治療で信頼を置かれている獣医師も「ゾウのことを 100%完璧に理解することはできない」と言う。こうしたゾウの「わからなさ」に彼らがこだわるのは、ゾウを単純化し、わかったかのように勘違いしてしまうことは、人間よりも身体の大きなゾウと付き合う上では非常に危険なことだからである。だからこそ、彼らはゾウをわかっていく努力を日々続けていた。私は、このわからなさに留まりつつもわかろうと努力するという態度は、クアイの人々やゾウのことを知りたいと思う私の研究にとっても重要なことだと感じた。彼らのことを完璧に理解することは出来なくとも、理解する努力を続け、フィールドを離れても彼らの声に応答し続けていきたいと強く思った。

今後の社会貢献

調査地では、パンデミック下で失業したゾウたちがいまも不安定な生活を送っている。困難な状況にあるゾウとゾウ使いたちを支援するため、留学中に失業ゾウ実態調査・支援チームを立ち上げるとともに、メディアを通じた発信も行ってきた（TBS 世界ふしぎ発見！2022 年 9 月 10 日放送回、東京新聞 2023 年 9 月 21 日、note ズウの村の住人など）。今後も、調査データの支援団体との共有や、支援者に向けた情報発信を継続することで、現地の人々やゾウたちに応答しながら研究を続けたいと考えている。

研究においては、この二年間の研究成果をもとに、多種のネットワークにおけるケアや知識の生産を主題とした博士論文を執筆することが目標である。パンデミック下ではゾウが直面することとなった困難な状況に対して、ゾウ使いたちが非難される様子を目の当たりにした。しかし、ゾウが置かれた状況は、ゾウとゾウ使いの二者間に閉ざされた場で生じるのではなく、その時代ごとにゾウが従事する産業やゾウを取り巻く自然環境の中で、様々なアクターとの関係を通じて生起するものである。今後、研究者として、そうした絡まり合いの様相を丁寧に描き出し、発信することで、実際に人と動物が関わり合う場で生じるケアと知識の生産の可能性を提示し、より良い関係の構築へと貢献することを目指したい。



写真1：タイ東北部スリン県の「ゾウの村」の一つとして知られるタクラン村の仏教行事の様子。この地域では、ゾウがゾウ使いとともに道を歩いている光景が日常風景である。ゾウと暮らす人々はゾウを「家族」と語り、ゾウを所有していない人々もゾウのことを「隣人」として語る。ここでは、ゾウがいることが「当たり前」となっている。

写真2：参与観察を行った観光開発プロジェクトのエレファント・ホスピタル。プロジェクトに参加する200頭のゾウに対して医療サービスを提供している。この日は、ホスピタル以外の部署のスタッフも集まり、ゾウの定期健康診断が行われた。



写真3：エレファント・ホスピタルで行われた研究プロジェクトの様子。この地域のゾウはクアイの人々が個人で所有するゾウであるため、研究には所有者やゾウ使いも参加する。そこでは、獣医師、検査技師、栄養士、ゾウ使いなどがそれぞれの知識を持ち寄って議論を交わす様子も見られた。